

しま、漢文を問ひ直す

二〇一八年二月、高等学校の学習指導要領（案）が公表されました。高等学校国語は科目構成の大幅な見直しが行われ、学校現場にも変化が求められています。こうした流れの中、漢文教育は何を目指していくのか、何を求められているのか、漢文教育にかかわるさまざまな先生方からご意見をいただきました。先生方に伺った質問は、次の二点です。

① 漢文を学ぶ意味はなんだと思いますか。

② これから求められる漢文教育について、どのように考えますか。

石川忠久（いしかわただひさ）

一松學舎大学顧問

① 漢文は、日本の文化であり、文学の基礎基本である。日本で文学を学ぶ以上どこかで必ず触れるものであり、必要になるものである。やらないわけにはいかない。

② 私が漢詩に興味をもったきっかけは、中学生の頃に、『唐詩選』の詩の朗朗とした響きに惹かれたことだった。先生方は積極的に朗読に取り組んでほしい。朗読を繰り返すうちに、漢詩文の調子が身体になじんでくるし、声に出して読み、耳で聞くことで内容も理解できる。

昔から漢詩文の学習は朗読や暗唱が基本

である。このように、連続と続けられてきたことは理に適っていることが多い。これから授業のあり方や、教室の状況がどのようにに変化したとしても、漢詩文は「声に出して読む」ことを意識して続けてほしい。また、座学や暗記など、いわゆる詰め込み教育をよしとしない風潮があるが、知識がなければ発展的な学習もできなくなってしまう。基本的な教養を身につけることをおろそかにしないでほしい。

大橋賢一（おおはしけんいち）

北海道教育大学旭川校教授

① 日本語の特色を考えるとときに、比較の

対象があったほうがその特色を見出しやすい。その比較の対象として漢文は適切な対象となり得よう。例えば漢詩と短歌などの日本の短詩型文学と比較すれば、双方の特徴がより明確になるだろう。

訓読という行為は逐語訳の一つである。日本人がどのように漢文を解釈してきたのかを学ぶことは、古代の日本人の学術水準を理解する上でも意義があると思う。

現代の日本語で書かれた文章は、少なくとも漢文を訓読した書き下し文の影響を受けている。その元となっている漢文を学ぶことは、現代の日本語の由来を考える上で不可欠であろう。

② 日本人が綴った漢文をこれまで以上に

増やす必要があると思う。日本人が綴った漢文も日本文学の一つであるはずだから。

日本の文学教材と同じく、漢詩漢文教材を分析させるような授業を増やしたい。複眼的な視点を養うために、和漢の比較から始めるのが適当であろう。

奥村準子

(おくむらじゅんこ)

筑波大学附属高等学校教諭

① 漢文や古文など「古典」を学ぶ意味は、長い年月をかけて先人が継承してきた、価値ある魅力的な作品(文化的財産)を現代に生きる私たちが享受し、次代へ繋いでいくことです。殊に高等学校で学ぶ漢文の多くは、古代中国の名句・名文を訓読したものであり、そのテキスト(本文)はアジア各地の若者が学んでいるものでもあります。グローバル化の進む現代において、異なる国や地域で異なる言語を話す若者同士が、文学や言語の学習分野で共有するテキストを持つことの意義は大きいと考えます。

② 高等学校の次期学習指導要領で必修科目となる「言語文化」において示された方

向性の一つに、「古典(古文・漢文)だけでなく、古典に関わる近現代の文章を通じて、言語文化を、言葉の働きや役割に着目しながら社会や自分との関わりの中で生かすことのできる能力の育成」(傍線筆者)とあります。漢文を学ぶことで、生徒の生き方や考え方の刺激となり、現代の社会や文化とのつながりを考える契機となる「良き問い」を用意することが、今後さらに求められると思います。

加藤敏

(かとうさとし)

千葉大学名誉教授

① 古典の中で漢文ほど面白く楽しいものはない。寓意の切れ味は抜群だし、一編の笑話も底抜けにおかしい。詩文に表現された思索や情感は今も心を打つ。先人の言葉は、学ぶことと同時に学ばないことの価値さも語っているし、価値のないことの価値も示唆している。漢文は私たちが求めれば、多様な知の可能性を拓いてくれることもある。現代における古典の価値、グローバル化の名の下に唱えられている主体的な課題

解決能力の育成、そんな冷え冷えとした荒野に漢文や古文を追いやらないでほしい。

② 古典を学ぶ要諦は、時間をかけて十分に考えることである。このあたりまえのことが忘れ去られている。もちろんファストフードの古典はそれとして楽しめばよい。それも大切だ。しかし、しっかりと向き合って対話しつつ、じっくり考えなくてはならないものもある。

古典との対話は、自らに出会い、自らを見つめ直すことでもある。生徒と先生、それぞれの琴線に触れるような古典との出会いはどうすれば可能なのか。漢文教育に問われているのはそのことだけである。

加藤直志

(かとうただし)

名古屋大学教育学部附属中・高等学校教諭

① 日本について理解を深めるため。わかりやすい一例を示す。漢文で「臣」という語が出てくる。意味を聞くと多くの生徒は「えらい」と答える。「大臣の「臣」だから」と。だが間違い。「家臣」の「臣」だから「家来」が原義であり、君主を前にして、謙遜した結

果「わたくし」という意味になる。「総理大臣」は、語義上は「天皇の臣下のなかで、全てをとりまとめる人」。よって、presidentではなく、prime minister（序列一位の大臣）と英訳する。アメリカなどは国の成り立ちが違うことがわかる。

② 漢文と日本との関わりを理解させる教育が重要である。教科書には、『源氏物語』と「長恨歌」との関係が紹介されている。両者を比較して議論する授業なども面白い。また、日本人も漢文を書き記してきたことも伝えておきたい。日本漢文の教材を増やすのも一案ではないか。ただし、従来型の授業で、基礎をしつかりと教えていくことも大切である。教育改革を意義あるものにするためにも、そこは主張しておきたい。

北久保友希

(きたくほ ゆき)

東京都立南多摩中等教育学校主任教諭

① 小池百合子氏が話す言葉にカタカナが多いことはメディアでも広く指摘されていますが、小池氏が示す通り、「何を学んできたか」ということは話す言葉や思考に、

大きく影響するのだと思っています。

三島由紀夫が自決の九か月前に残した対談のテープの中で、「漢文の古典の素養がなくなっているから、日本人の文章はだらしなくなつた」と語つたと以前新聞報道で読みましたが、ここで三島が言おうとしたことは、漢文世界のさまざまな事象のみならず、思想、死生観、感情の高揚のさせ方、文のリズムを含む、漢文の全ての要素を知つた上で日本語は語られるべきだ、ということだと思っています。漢文を学ぶことで、日本語の成り立ちを学びなおし、日本語がどんな研鑽の中で生み出されたのかを知ること。三島はそれが、日本語を受け継ぎ、未来の日本語へと昇華させていく私たちの使命であると考えていたのでしょうか。ここに、私も漢文を学ぶ意味を感じています。

② 音読を授業の中心に据えた上で、文と文とのつながりの理解を定着させることを意識しています。

音読では、漢文の音の響きの小気味よさを感じることを皮切りに、文章と文章のつながりの小気味よさ、論理展開の適切さを感じてほしいと思っています。上手な文章

① 漢文を学ぶ意味はなんだと思いますか。

② これから求められる漢文教育について、どのように考えますか。

を書くために必要なのは、実は描写力ではなく展開力です。長々と説明が多すぎると、重たい文章になり、つながりを明確にしすぎると、味気ない文章になります。そのつながり方が漢文は絶妙です。漢文の文章に慣れることは、思考の鍛錬につながり、新学習指導要領が示すところの思考力・表現力育成の一端を担うものと考えます。

笹原宏之

(ささはら ひろゆき)

早稲田大学社会科学総合学術院教授

① 日本の社会や文化に大きな影響を与えた隣国、中国について知ることです。また中国古典をもとに日本漢文が生まれ、古典作品も大きな影響を受けてきたため、その内容を理解するために漢文と読解法の知識は不可欠です。

日本語に与えた影響も大きく、漢語や和製漢語の意味の正確な理解のために漢文の素養は重要です。すべては語ってくれないことがあります、それも過去の東洋人の事実を知ることとなります。先人の経験や知恵に満ちた素材は、西洋文明との比較も

行える教養を形成し、歴史に対する眼も持った引き出しの多い人物を育むはずです。

② 授業時間も受験で出題される機会も減少していますが、漢文の書かれた時代背景、社会、内容や人物の心情の理解だけでなく、言語教育としての漢文の授業が充実するとよい。ことばや文字だけでなく、生活の根にあるもの、自身も歴史の一部であることを認識させ、漢文の読解力が古人からの情報、メッセージ、異文化を読み解くためのキーとなることを知らせる必要があります。現在は、再読文字や不読文字を覚え、返り点を打ちながら読み下して現代語訳をする作業に時間が割かれますが、特定の訓点語に必要以上にこだわらず、古文や現代日本語、中国語や英文との類似点や相違点も指摘し、もとは古代中国語を表記していたことを意識させると、正確な認識がなされるでしょう。

田中芳樹

(たなかよしき)

作家

① 好きでやっていることなので、あまり

意味や意義を考えたことはない。しいていえば、漢字の造語能力に触れられることだろうか。今日でもコンピュータを「電脳」、宇宙飛行を「航天」と訳する造語能力には舌を巻く。

② 音読によるリズム感をたいせつにしてほしい。テキストは何でもよいが、『史記』『項羽本紀』や唐宋詩を音読するときのリズム感は心地よいし、また心地よく思う感受性が育てば幸いである。

田邊閑雄

(たなべしずお)

東洋英和女学院高等部講師／
海陽学園講師／全日本漢詩連盟理事

① 漢文は、元は隣国のものだが、遥か昔から日本語と日本文化の根幹に入り込んでいる。日本の古典として避けて通ることはできない。

最近、国際人の養成という言葉が流行だが、自国の文化や歴史を説明できない者が真の国際人といえようか。英語が話せて外国人と仕事ができるだけでよいなら、賃金の高い日本人を雇わないだろう。質の高い教養は、質の高い人間を生む。

また、漢文は、最高の論理トレーニングでもある。頭は使わないうと錯びてしまう。漢文で鍛えよう。

② とかく利那的で短絡的と評される現在の風潮。これは若者世代に限らない。だが、漢詩漢文だけ清貧孤高でよいのか。短歌や俳句は時代の風潮に歩み寄り、裾野を広げている。座して死を待つわけにはいくまい。カントや数学も漫画になる時代。『漫画でわかる杜甫の一生』や、李白を歌うボーカロイドのコンサートがあってもよいと思う。

寺師貴憲

(てらしたかのり)

駿台予備学校漢文科講師

① 人生を生き抜くうえでのヒントを得られることだと思います。たとえば、だれもが勝ち組になれるわけではない、この生きづらい世の中で、「上善は水の如し」——万物を助け、争わず、むしろ人の厭う低きに流れる水のごとき生き方が最上の善である——などと『老子』に教わると、これまでとはちがう生き方が見えてきます。『論語』『老子』『葉根譚』に散りばめられた金言から

も、『史記』『左伝』『世説新語』に描かれる逸話からも、多くのヒントが得られます。豊かに生きるための知恵を学ぶ。漢文を学ぶ意味はそこにあるのかなと思っています。

② 一三〇〇年以上読みつがれてきた漢文は、現在のマルクス、フーコー、ごく最近ではガザニカ、ピケティのようなもので、必須の教養であり、日本の古典文化の基層になっていきます。今後の漢文教育でも、その基層たる「漢文の素養」を学べるものが望ましいですし、それに加えて子どもたちの人生を豊かにするヒントに満ちたものであってほしいと思います。

西一夫 (にしかずお)

信州大学教授

① 漢文を学ぶことには、二つの意味があるのではないか。一つは中国文としての典籍を読むこと、いま一つは彫琢ちやうたくを施した漢字で記された日本語文を読むことである。前者は、私たちが書記言語として漢文を学んだ背景を知るこれまでの漢文教育に相当し、後者は漢字を錬成し彫琢を施す過程や

表現の実相を理解することである。

② ①の両輪の後者は、文字文化に意識を向ける次期学習指導要領で留意すべきであり、「我が国の言語文化」が「伝統的な言語文化」を包摂する構成を見て「日本語としての漢文」の意識が重要だろう。

漢文を訓読によって受容したことが、日本語の文体に多様性をもたらした。現代日本でも、故事成語や熟語の背景を理解・活用し、漢詩の表現美を味わい・伝えることができるのも、漢文を日本語として取り込んだためだということを意識したい。

ただし、ICTの活用によって文字文化は変容しつつある。そこで、漢字・漢文が、書記・読解の手段であると同時に、創出手段としていかなる意義を担うかを意識すべきだろう。国字創造や文字合成で新たな読みや文字を創出する漢字・漢文という位置づけも考えられる。

横山悠太

(よこやまゆうた)

作家・日中学院日本語教師

れない関係にあります。またその内容においても、古来から長きにわたり、日本人の思想や精神に多大な影響を与えてきたものです。この二点からも、確かな国語力を身につけるためには、漢文を学ぶことが欠かせないのでないかと思われまます。

② ①をふまえてのことですが、漢文が日本語の成り立ちにどう関わってきたかという視点をもう少し盛り込むことです。そのためには、現代文・古文・漢文というようにくつきり三分割するのではなく、もっと柔軟に、また時系列的に日本語をとらえさせる必要があります。例えば、平家物語は古文の時間に習うのが通例ですが、これは古来からの和文と漢文のせめぎ合いのなかで生まれた和漢混濁文の名文です。日本人は時代時代で和文(和語)と漢文(漢語)をいかに選択し、織り交ぜ、文章を書くかに苦心してきたのです。日本語の本当のセンスは、こういったことの会得からこそ培われるものではないでしょうか。

① 漢文は日本語の成り立ちと切っても切

① 漢文を学ぶ意味はなんだと思いますか。

② これから求められる漢文教育について、どのように考えますか。

「速報」

新学習指導要領(案)について

編集部

二〇一八年二月一四日、高等学校学習指導要領(案)についての意見公募が始まりました。正式な学習指導要領の公表は意見公募を経た後のことですが、現時点の案をもとに、古典に関わる内容を中心にご紹介します。

● 国語の科目構成と目標

必修科目は「現代の国語」(2単位)、「言語文化」(2単位)の2科目となった。また、選択科目は「論理国語」(4単位)、「文学国語」(4単位)、「国語表現」(4単位)、「古典探究」(4単位)の四つから選択することになった(図1)。

「現代の国語」の目標に知識・技能について「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする」とある。「言語文化」の目標には「生涯にわたる社会生活に必要な国

語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする」とある。従来の「現代文」「古典」という区別ではなく、科目の目標としての資質・能力をいかに育成するかという視点からの科目編成となる。また、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」領域別に配当時間数が示されている(図2)。従来の区分を単純にあてはめることは難しいが、ここでは古典分野に深く関わると考えられる必修科目「言語文化」と選択科目「古典探究」について取り上げる。

図1 高等学校国語の科目の再構成

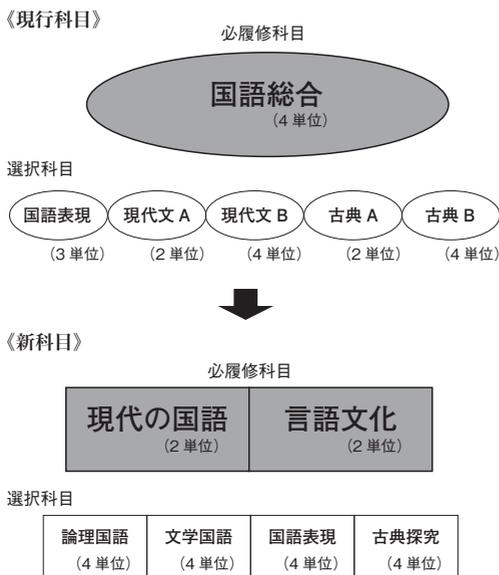


図2 領域別配当時間数

必履修科目	
現代の国語 2 単位 / 70 単位時間 0 50 100 (単位時間) ▼	
話す・聞く 20-30	書く 30-40
読む 10-20	
言語文化	
2 単位 / 70 単位時間 [古典] [近代以降] 5-10 40-45 20	
選択科目	
論理国語 4 単位 / 140 単位時間 0 50 100 (単位時間) ▼	
50-60	80-90
文学国語	
4 単位 / 140 単位時間 30-40 100-110	
国語表現	
4 単位 / 140 単位時間 40-50 90-100	
古典探究	
4 単位 / 140 単位時間 140	

● 領域と言語活動

「内容」は「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」に分けられている。「知識及び技能」では「言葉の特徴や使い方に関する事項」「我が国の言語文化に関する事項」「(話や)文章に含まれている情報の扱い方に関する事項」(「話や)もある)のそれぞれについて指導事項が設定されている。「思考力、判断力、表現力」については、各科目で設定されている「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」について、指導事項とそれを指導するための言語活動の例が示されている。

【言語文化】

「書くこと」「読むこと」について、時間数が設定されている。「言語文化」の中で古典領域の占める割合については、「内容の取扱い」で『B読むこと』の古典に関する指導については四〇〜四五単位時間程度を配当する」とされている(図2)。なお、「近代以降の文章」については同様に二〇時間程度配当することとされている。

あげられている言語活動例は以下のようなものである。
 ・「書くこと」の言語活動例

ア 本歌取りや折句などを用いて、感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり、伝統行事や風物詩などの文化に関する

題材を選んで、随筆などを書いたりする活動。

・「読むこと」の言語活動例

ア 我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論、随筆などを読み、我が国の言語文化について論述したり発表したりする活動。

イ 作品の内容や形式について、批評したり討論したりする活動。
ウ 異なる時代に成立した随筆や小説、物語などを読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする活動。

エ 和歌や俳句などを読み、書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり、テーマを立ててまとめたりする活動。

オ 古典から受け継がれてきた詩歌や芸能の題材、内容、表現の技法などについて調べ、その成果を発表したり文章にまとめたりする活動。

【古典探究】

「古典探究」では、「話す・聞く」「書く」の領域は設定されず、「読むこと」のみについて設定されている。また、「内容の取扱い」では「古文及び漢文の両方を取り上げるものとし、一方に偏らないようにすること」とされている。言語活動例は以下のとおりである。

ア 古典の作品や文章を読み、その内容や形式などに関して興味をもったことや疑問に感じたことについて、調べて発表したり議論したりする活動。

イ 同じ題材を取り上げた複数の古典の作品や文章を読み比べ、思想や感情などの共通点や相違点について論述したり発表したりする活動。

ウ 古典を読み、その語彙や表現の技法などを参考にして、和歌や俳諧、漢詩を創作したり、体験したことや感じたことを文語で書いたりする活動。

エ 古典の作品について、その内容の解釈を踏まえて朗読する活動。
オ 古典の作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ、その成果を発表したり報告書などにまとめたりする活動。

カ 古典の言葉や現代の言葉と比較し、その変遷について社会的背景と関連付けながら古典などを読み、分かったことや考えたことを短い論文などにまとめる活動。

キ 往来物や漢文の名句・名言などを読み、社会生活に役立つ知識の文例を集め、それらの現代における意義や価値などについて随筆などにまとめる活動。

●教材について

扱われる教材については「内容の取扱い」の中で触れられている。

【言語文化】

ア 内容の「思考力、判断力、表現力等」の「B読むこと」の教材は、古典及び近代以降の文章とし、日本漢文、近代以降の言語文や漢詩文などを含めるとともに、我が国の言語文化への理解を深める学習に資するよう、我が国の伝統と文化や古典に関連する近代以降の文章を取り上げること。また、必要に応じて、伝承や伝統芸能などに関する音声や画像の資料を用いることができること。

イ 古典の教材については、表記を工夫し、注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用い、特に漢文については訓点を付け、必要に応じて書き下し文を用いるなど理解しやすいようにすること。

(ウ、工略)

オ 古典の教材は、次のような観点に配慮して取り上げること。

(ア) 伝統的な言語文化への理解を深め、古典を進んで学習する意欲や態度を養うのに役立つこと。

(イ) 人間、社会、自然などに対する様々な時代の人々のものの見方、感じ方、考え方について理解を深めるのに役立つこと。

(ウ) 様々な時代の人々の生き方や自分の生き方について考えたり、我が国の伝統と文化について理解を深めたりするのに役立つこと。

(エ) 古典を読むのに必要な知識を身に付けるのに役立つこと。

(オ) 現代の国語について考えたり、言語感覚を豊かにしたりするのに役立つこと。

(カ) 中国など外国の文化との関係について理解を深めるのに役立つこと。

【古典探究】

ア 内容の「思考力、判断力、表現力等」の「A読むこと」の教材は、古典としての古文及び漢文とし、日本漢文を含めるとともに、論理的に考える力を伸ばすよう、古典における論理的な文章を取り上げること。また、必要に応じて、近代以降の言語文や漢詩文、古典についての評論文などを用いることができること。

(イ略)

ウ 教材は、言語文化の変遷について理解を深める学習に資するよう、文章の種類、長短や難易などに配慮して適当な部分を取り上げよう。

●今後のスケジュール

新指導要領に基づく教科書は、二〇二〇年に必修科目の「現代の国語」と「言語文化」が、二〇二一年に選択科目4科目の検定受付があります。二〇二二年から必修科目、二〇二三年から選択科目が使用開始されます。

※新学習指導要領(案)は、文部科学省のウェブサイトで全文を読むことができます。

【授業実践】物語のなかでこそ生きる故事成語

酒井雅巳さかい まさき
(巢鴨中学校高等学校)

高校二年のときである。漢文の授業で大恥をかいた。^{注A}先ずかひ隗より始めよ」を授業で学習した後、まとめをしているときに「郭隗かくわいの作戦によって、燕えんに多くの賢者がやってきた。

その賢者の中でも特に有名な人は誰ですか？」と先生が発問して、私を指名した。私は立ち上がり、「蘇秦そしんです。」と答えた。教室内が「え？」という雰囲気になったのを忘れられない。先生は私の答えをスルーし、「このとき燕を訪れた賢者のなかで特に有名なのは楽毅ですね。」と言って、そのまま授業が進行していった。そのときの私は、燕を訪れた賢者は「蘇秦」だと完全に思っていた。なぜ私は「蘇秦」だと勘違かんちがひいしていたのか。それにはいくつかの理由がある。

①このとき、授業で習った教材が「先ず隗より始めよ」と「鶏口牛後」であり、この順番で習ったこと。「鶏口牛後」

は、蘇秦が合従策を説得させるために趙の肅侯に言ったこ

とば。「いつそ鶏のくちばしとなっても、牛の尻尾になつてはいけない（大国である秦に従うよりも、小国でも同盟を結んで独立を保つべきだ）」。

②「先ず隗より始めよ」の教科書の本文が、「於是、土争趨燕おもむ。（是に於いて、土争ひて燕に趨く）」で終わっていたこと。

①がなぜ勘違いの原因となるのか。それは教わった順序が「先ず隗より始めよ」「鶏口牛後」であったことにポイントがある。本来の話の時系列と、掲載順が逆なのだ。おそらく、句法の教えさせる順序の問題や、文章の難易度を考慮してこのような順序になっていたのだと思う。私はこの順序で教わった結果、大きな勘違いをしてしまった。すなわち、
(1)燕の昭王が国を再建するために賢者を招こうとする。「先ず隗より始めよ」
(2)秦の国で受け入れられなかった蘇秦が燕にやってきて、文

注A…燕の内乱に乗じて斉が強襲、燕は滅亡寸前まで追い込まれる。その後君主にいた昭王は、国を再建するために臣下の郭隗の作戦を採用し、多くの賢者を招き入れる。この中の一人が楽毅であり、この後大活躍する。

注B…蘇秦は燕の文侯に重用される。強大な秦に対抗するために、秦以外の六国が一九になる合従策を提唱。六国を見事にまとめあげた。この時代、秦が天下統一する紀元前二二一年まで、秦を含む燕・斉・趙・韓・魏・楚の七国がしのぎを削った。

侯（この時点で昭王ではないことに気づくべきなのだが…）に合従策を説く。「鶏口午後」

という構図を自分の脳内に勝手に作り上げてしまったのだ。

さらに②にあるように、教科書の本文は「於是、土争趨燕。」で終わっていた。この後、「樂毅自魏往（樂毅は魏より往く）」と文章が続くのだが、教科書ではそれが省略されていたため、「樂毅」に気づかなかったのだ。

担当の先生の名誉のために言っておくが、当然ながら先生は、「この後、樂毅がやってきて、斉を倒すのです」と説明している（友人のノートを見ると、樂毅と書かれていた）。

時が経って、自ら漢文を教える立場になった。先ほど述べたような失敗した経験を生かし、「自分が起こした勘違いを生徒にさせないようにするにはどのように教えればよいか」ということを常に意識しながら授業をしている。しかし、実際教科書の掲載順に教えようとすると、特に故事成語の単元は時系列がずれているので注意が必要だ。我々はそのことを考慮にいれて学習材を選定し、授業を構築しなければならぬ。このようなことを踏まえ、故事成語を教えるときには、なるべくストーリーのなかに組み込みながら教えるようにしている。副教材としてよく使用するのは、宮城谷昌光の『孟嘗君』（講談社文庫）だ。『孟嘗君』を授業に採り入れるメリッ

トとして、

①わかりにくい戦国時代の状況が時系列に整理されている。
②戦国時代中期の物語なので、教科書でよく出てくる人物がオールスターのように登場し、なじみやすい。

といったことが挙げられる。孟嘗君は戦国時代中期を生きて戦国七雄の各国を飛び回り活躍した人物である。小説なので創作の部分もちろんあるのだが、ごちゃごちゃしてわかりにくい戦国時代の状況がきちんと整理されて描かれていて、とても分かりやすい。故事成語もこのあたりの時代のもので多いので、作中にふんだんに故事成語のエピソードが盛り込まれている。注C商鞅・孫臏・孟子・蘇秦・張儀など、教科書でおなじみの名前が随所に登場し、なじみやすい。生徒も物語の流れのなかで故事成語の成り立ちを覚えられるので、生徒も理解がしやすいようである。

『孟嘗君』は文庫で全五巻であり、全てを授業で扱うのは難しい。ただ、孟嘗君が活躍するのは最終巻であり、五巻だけを読んでも作品の雰囲気は味わえる。また、五巻には「海大魚」・「蛇足」・「鶏鳴狗盗」と数多くの故事成語のエピソードが収録されているので、授業者が一〜四巻のおおまかな流

注C：戦国時代、衛の人。秦の項王に仕え法政治主義を唱えた。著書に『商子』がある。

注D：戦国時代、斉の人。兵法家。『孫子』を著した孫武の子孫。

注E：戦国時代、魏の政治家。秦の恵王のために連衡策を唱えた。

れを先に教え、実際の授業では五巻を読みながら学習するの
が実際に授業のできるスタイルだろう。

私は、『孟嘗君』を読みながらの故事成語の単元学習を、
高校一年生を担当したときに行った。このとき使用していた
教科書が大修館書店の『国語総合 改訂版 現代文編 古典編』
(国総344・345)であり、この教科書には「蛇足」が収録され
ていたので、今回は「蛇足」を使って学習指導案を作成した。
実際に行った授業の展開は以下の通りである。(全三時間)

(一時間目)

①教科書の「蛇足」を読み、重要句法・語彙などを確認する。

(二時間目)

②『孟嘗君』一〜四巻の大まかな流れを説明する。

(三時間目)

③『孟嘗君』五巻の「海大魚」の章を読み、「蛇足」という言
葉がどのような経緯で生まれたのか、グループで一枚の紙
にまとめさせる。

②では、登場人物の関係図や時代背景などを一枚の紙など
にまとめて生徒に示すことができる、理解の手助けになる。
③の経緯をまとめさせるとき、教科書のリード文などでは今
ひとつはつきりしなかった点にスポットを当ててまとめさせ
ると、記憶に残りやすい。教科書には「蛇足」に次のような

リード文が掲載されている。

戦国時代、楚の国のある将軍が魏の国を攻めて勝利を収め、
勢いに乗じて齊の国を攻めようとした。その時、齊王の意を
受けた一人の論客が、齊への攻撃を思いとどまらせようと、
「蛇足」の話を用いて将軍を説得した。

このリード文を読み、「蛇足」を読んで重要句法や語彙な
どを確認した後、生徒からは次のような質問があった。

(1)魏に勝った後、なぜすぐに齊を攻めたのか。

(2)なぜこの『蛇足』の話で楚の攻撃をやめさせることができ
たのか。

極めて鋭い質問である。彼らは蛇足のエピソードの内容は
理解しているし、「蛇足」という言葉がどのような語源なの
かも理解できている。しかし、どのような経緯で「蛇足」が
生まれたのかを知らないのです、このような質問が出るのだろ
う。このときは、この質問内容を念頭に置かせてグループで
まとめさせた。

この単元の後、多くの生徒が自発的に『孟嘗君』の全五巻
を購入していた。少しでも漢文の世界に興味をもってくれれ
ば嬉しい限りである。

【授業実践】 故事成語で表現力をきたえる

おむらとぎ お
大村 勅夫

(北海道旭川東高等学校)

高校の漢文学習の教材として、故事成語に関する文章（以下、故事教材と略す）を使用する機会は少なくないだろう。それは、平成二六年度版の国語総合教科書全てに故事教材が掲載されていることから判断できる。つまり、故事教材について考えることはより実践的なことである。

さて、故事教材には次の三つの特徴が考えられる。

- ① 寓意や喩えがあること
- ② 短めで簡明な文章であること
- ③ その語が現代の生活にも生きていていること

大修館書店の教科書に掲載されている故事成語を例に本校生徒にアンケートしたところ、既習のものを除き「おおよそ以上、その語について知っている」と五割以上が回答したものが、「守株」「借虎威」「五十歩百歩」、また、そうでないものが「知音」「画竜点睛」「漱石枕流」「助長」「糟糠之妻」「塞翁馬」だった。以下に、これらのことを活用した単元を

提案する。

一つめは、故事教材が寓する内容を推論させる活動を取り入れた実践である。単元のねらいは「故事成語について理解し、現代社会に生かせる表現力をきたえる」である。故事教材の構成の巧みさを推論しながら解釈することや、故事教材をモデル例として寓話を創作する活動を通して、理解しようというねらいである。

学習者は先のアンケートをとった、本校第一学年四〇名である。古典への学習意欲は低いとは言えないが、古典学習が国語力向上へとつながることに疑問を有している者もいる。先のアンケート結果から「知音」を教材として用いることとした。以下の手順で指導を進めた。

第一次…故事成語の特徴を提示する。

「知音」の現代日本での意味推論、生徒になじみのない

「知音」の故事のあらすじを予想させる。

第二次…「知音」故事の読解を（大修館教科書掲載部分）させる。

「知音」が寓している内容の推論、教材の前後文の解釈をさせる。

第三次…寓話の創作と相互鑑賞を行う。

第一次では、まず、故事成語とはどのようなかを確認した。ここで、故事成語を一〇語以上知っている者は一名のみであった。また、特徴という観点から故事成語を捉えると、動物などが出てくる、教訓的である、といった意見が多数出てきた。「知音」の意味を知る者はおらず、これが故事成語であると示した上で、文字を見せたのみで推論させたところ、その字面のまま、「音や声を知っていること」、「この音がどの楽器のものかがわかること」などの意見であった。次に、現代日本での語義を示したのちに、「知音」の故事のあらすじを予想させたところ、「声を知っていたので目が見えなくなってもその人を認識できたほど仲がよい話」などの意見が出された。

第二次では、「知音」故事を提示し、読解させた。学習者は、¹⁾志の文中での意味や、突然に鐘子期の死が述べられる展開にいくらかの考察を要していたが、脚注などを参考にしながら、内容のほとんどを把握できていた。その上で、こ

の故事はどのようなことを寓しているか、を推論させた。「音（＝琴）」というたった一つのことをよく理解することが、お互いに相手をよく考えるところにつながる、「ものごととはうわべだけでなく、本質を込められた意図を知ることだ」、「自分の気持ちをわかってくれる人がいないと生きる活力がなくなるので、親しい友達をいっばいつくろう」などであった。中には、「ある物事において上を目指すためには、自分を理解してくれる人々の存在が必要であること」と推論出来た者もいた。そして、教科書掲載部分の前後文を配布し、解釈させ、「知音」故事が寓しているものを確認させた。

なお、第一次、二次では適宜グループワークを取り入れた。個人の持つ知識や情報をグループで共有・総合して、提示された限定的な部分を考えさせたい。グループワークをとおして、与えられた情報と自分たちの知識とを総合・活用するという思考方法を体感できる。

第三次では、改めて、寓話の価値を確認させ、実際に創作させた。このような課題提示である。「あなたは、小学校で一日教育実習をすることになりました。その中で、小学生に向けて、²⁾〇〇ってすばらしい・大切だ」というテーマでお話することになりました。このテーマが小学生にも理解できるよう、寓話を用いて話してください。」

この課題に提出された作品例を一つあげる。テーマは「愛

や恋ってすばらしい”である。

「二匹のアリ」

いじわるなアリ①は、いつもアリ②をいじめていました。食べ物がなくなればうばいに行ったり、巣をこわしに行ったり。ところがある日、①の巣は人間にこわされ、中であつた食べ物も砂でうまり、取れなくなつてしまいました。住む所も食べ物もなくして何日も経ち、死にそうになつていた①の状況に気づいた②は、①を自分の巣まで連れて行つてくれ、食べ物も沢山くれました。そうして①は、優しくされることのありがたさ、愛を持つて接する素晴らしさを知りましたとき。

実践後の学習者アンケートには次のような記載があつた。

・今までは、ただかたくなるしいだけの文章だと思つていましたが、何を伝えたい文章なのか、どのような内容なのかというところに真剣に向き合うことで、今までよりも漢文に興味を持つて取り組むことができました。

・自分でたとえ話を作つてみることで、間接的に誰かに何かを伝えることがいかに難しいかについて知ることができました。

こうしたアンケート結果から、生徒は積極的に学びを獲得できたものととらえる。

また、発展させた活動として、故事教材本文の述語のみを提示して内容等を推論させる活動単元を提案したい。活動の手順は以下のとおりである。

第一次…故事教材から原則述語と訓点以外を伏せて虫食い状態にしたワークシートを提示し、そこから、わかる範囲で内容やどんな故事成語が成り立ったかを推論させる。また、このステップでは漢和辞典は使用させない。

第二次…ワークシートの中の漢字を一〜二字のみ調べてよいとする。学習者は、漢字と訓点と文構造を頼りに推論を進めているが、そこで字義の情報を与えることで、字義の重要度を確認させることになるだろう。

第三次…主語を提示する（省略されている主語は除く）。

第四次…本文を提示し、読み取りができた箇所、できなかった箇所を確認させる。

この活動に適した故事教材は、「五十歩百歩」などの人口に膾炙したものだろう。漢文学習および国語学習で培った様々な能力や知識の活用を要するものである。高校でのまとめ単元として考えてよいだろう。

授業で反応のよかった故事成語ランキング

わたなべ まさゆき
渡辺雅之

(元筑波大学附属高等学校)

故事成語ベストテン(二〇一〇年)

- | | |
|-------------------|--------------|
| 1 背水の陣(26票) | 『史記』 淮陰侯列伝 |
| 2 愚公山を移す(20票) | 『列子』 湯問編 |
| 3 閩南の志(19票) | 『莊子』 逍遙遊編 |
| 4 骸骨を乞ふ(15票) | 『史記』 項羽本紀 |
| 5 顰みに做ふ(12票) | 『莊子』 天運編 |
| 6 一將功成りて万骨枯る(11票) | 『全唐詩』 曹松 己亥歲 |
| 7 尾を塗中に曳く(10票) | 『莊子』 秋水編 |
| 7 疾膏盲に入る(10票) | 『左伝』 成公十年 |
| 9 疑心暗鬼を生ず(8票) | 『列子』 說符編 |
| 10 髀肉の歎(7票) | 『三国志』 蜀志、先主伝 |

これまで、三年生の選択の授業で一年間を通じて故事成語を扱うという授業を行ってきた。「故事成語四十」と題して、なるべく現在も使用されている四十の故事成語を取り上げ、

その元になった漢文を白文で配布し、背景を説明してから、訓点を施すという授業である。この四十という数は、年間の授業時数を勘案したものであり、取り上げた故事成語は、背景に興味深いエピソードがあるものを中心としたものである。白文での授業はかなり難度が高いが、背景を詳しく説明することによって、その難度は軽減される。

そして学年末に、四十の故事成語のうち、どの故事成語に興味をひかれたかについて、各自にベストスリー・ワーストスリーを挙げさせた。上に挙げてある「故事成語ベストテン」は、二〇一〇年度のものであり、受講者は四十八名であった。なお、ワーストスリーを挙げさせるのは、翌年にその教材を差し替えるための資料としてである。

1 背水の陣

全員が知っている故事成語である。ただし、言葉としては知っていても、どういう背景から生まれた故事成語かは知ら

ない生徒の方が多い。漢の韓信かんしんが数万という少ない人数でありながら、二十万と号する趙軍をやつつけるというストーリーが面白かったのであろうか、例年一位になる故事成語である。ただし、授業で取り上げた部分が少々長かったためか（敗軍の將は兵を語らず」という李左車りさしやのエピソードの部分まで取り上げた）、十五名がワーストスリーの方にも挙げています。工夫を要する部分である。

2 愚公山を移す

自宅の前の山をどけようとした愚公の「自分には子がいて、子々孫々続いていく。人間の方は無限であるのに山は高さを増さないのだから崩し続けられれば必ず山は取り除くことができる」という時間を超越したかのような壮大な発想にひかれるらしい。常識家である智叟ちそうとの対比も面白いのだろう。さらに、後年毛沢東が砂漠を緑地に変えようとした時のスローガンにもなったという補足説明も興味をひいたらしい。ただし、この故事成語は毎年ワーストワンにもなってもいる（この年は十六票）。その理由は取り上げた部分がやはりかなり長文となったためと、文章自体がやや難解であったことが嫌われたためだと思われる。

3 函南の志

『莊子』冒頭の部分で、巨大魚の鯤こんが巨大鳥の鹏ほうに変身するという話。変身した鹏が南海を目指して飛び立つが、その

際、水上を三千里滑走し、九万里の高さまで上昇してからでないと飛ぶことができない。このような極めてスケールの大きな話が好まれたようである。また、ワーストに取り上げた者は三名で、大方の生徒に好評である。

4 骸骨を乞ふ

二次次に「項羽本紀」を授業で扱っているので、生徒は范増ぼんぞうにはなじみがある。その范増が陳平ちんぺいの計略により、項羽に疑われ、結局は項羽の元を離れ、直後に病死するというストーリーの面白さと、鴻門の会での范増の策略による活躍と対比して、続編という意味合いで面白かったのだろう。この故事成語はワーストに挙げた者が一名であった。

故事成語は歴史を経て、現在も輝き続ける言葉である。語彙を増やすという意味合いで、言葉だけで教えることが多いが、言葉と意味だけでは面白みが少ない。どのような歴史的・思想的背景から生じたものかまで扱うと一層生徒の興味・関心を喚起することができる。

生徒は、故事成語だけでなく、漢文の他のジャンルでも、ストーリー性の豊かな話、スケールの大きな話を好むようである。教える側もそれを意識して教材を選んでいくことが、生徒の漢文嫌いを少しでも減らせる方策であるはずである。

地図で見る故事成語

監修 渡辺雅之



① 隴を得て蜀を望む (『後漢書』 献帝記)

欲が深く満足しないことのたとえ。後漢の光武帝が隴の地を得てその勢いのまま蜀の地を攻め取るうと望んだことから。

▼隴 甘粛省 蜀 四川省

② 夜郎自大 (『史記』 西南夷伝)

世間知らずで実力が無いのに相手に尊大に對すること。夜郎の異民族が漢の使者に自国と漢の国の大小を問いかけたことから。▼夜郎 貴州省

③ 洛陽の紙価を高からしむ (『晋書』 文苑伝)

著書が人気でよく売れること。洛陽で人気の作品を寫写するために紙が売れて高騰したことから。▼洛陽 河南省

④ 杞憂 (『列子』 天瑞編)

無用の心配。杞の国の人が天地が崩れることを心配した故事から。▼杞 河南省

⑤ 登竜門 (『後漢書』 李膺伝)

立身出世のための関門。鯉がこれを登れば竜になるという伝説から。▼竜門 山西省 河津県と陝西省韓城県の間の黄河の急流。

⑥ 破天荒 (『北夢瑣言』)

前人未踏のことをなしとげること。唐の荊州からはなかなか科挙の合格者が出ず、受験者を天荒解(不毛の地からの解送者)と呼んでいたが、やがて荊州からの合格者が出た時に「天荒を破る」といわれたことから。▼荊州 湖北省

⑦ 江南の橘江東の枳と為る (『韓詩外伝』)

その土地の風俗に染まって善くも悪くもなることのたとえ。▼江南・江東 長江の南を江南、東を江東という

⑧ 邯鄲の歩み (『莊子』 秋水)

他人のまねをしてうまくいかず、自分の本来の姿も失ってしまうこと。邯鄲の町で邯鄲の人特有の歩き方をまねても修得できず、本来の歩き方も忘れて這って帰ったことから。▼邯鄲 河北省

⑨ 邯鄲(黄梁)一炊の夢 (『枕中記』)

人の一生のはかなさのたとえ。盧生は邯鄲の町で自分の一生の栄枯盛衰を夢に見たが、それは黄梁が煮えきらないほどの短い時間だったという話から。

⑩ 南船北馬 (『淮南子』)

全国各地を旅すること。中国では南方は水路(船)、南方は陸路(馬)を用いることから。

教科書に取り上げられている

故事成語一覽

・二〇一八年度使用教科書を元に調査。一覽には故事成語及び由来となった故事を含む。

・科目名の下の漢字一文字は、教科書発行者の略称。

東Ⅱ 東京書籍、三Ⅱ 三省堂、教Ⅱ 教育出版、大Ⅱ 大修館書店、数Ⅱ 数研出版、文Ⅱ 文英堂、明Ⅱ 明治書院、筑摩Ⅱ 筑摩書房、第Ⅱ 第一学習社、桐Ⅱ 桐原書店

晏子之御 国総東三教数 古B 筑

燕雀安知鴻鵠之志哉 古B 東明

曳尾於塗中 古B 東三大数明筑

第 古A 大

臥薪嘗胆 国総東三教大明第桐

苛政猛於虎也 国総東筑 古B 文

古A 文

守株 国総東大明 古A 文

画竜点睛 古B 教大数明第桐

古A 大文第

完璧(完璧帰趙、完璧而归) 国総

筑第 古B 東三教

管鮑之交 国総東三教教筑桐

古B 明 古A 文

季札挂劍 古B 三教 古A 教

杞憂 古B 東明桐 古A 三

漁父之利(漁夫之利) 国総東三大

数第桐 古B 大文 古A 文

愚公移山 古B 三明筑

唇亡齒寒 古B 第

買履忘度 自買履 古B 教数明

鷄口牛後 国総東三大数明第桐

螢雪之功 古B 明 古A 文

鷄鳴狗盜 国総三教大第桐

嬰逆鱗 国総筑 古B 第 古A 文第

不顧後患 古B 三明第桐

江南橋為江北枳 古B 三教数桐

吳越同舟 古B 第

国土無双 古B 筑 古A 東

五十步百步 国総東大筑第 古B

明 古A 文

胡蝶之夢(夢為胡蝶) 国総教 古B

三教数文明筑第桐 古A 東第

鼓腹擊壤 国総明 古B 東教第

塞翁馬 国総東教筑桐 古B 東大

文明 古A 三文

三顧之礼 古B 明

死諸葛走生仲達 国総三教筑

古B 東第 古A 第

令七步中作詩 古B 明

四面楚歌 古B 東三教大数文明

筑第桐 古A 教大文第

出藍營(青取之於藍、而青於藍)

古B 東三

助長 国総東教数 古B 大第 古A

第

侵官之害 古B 東教大文明第桐

古A 大

水魚之交 国総数 古B 東大文第

古A 文第

推敲 国総東三筑桐 古B 明第

古A 文第

過猶不及 古B 大 古A 大文

創業守成 古B 東明文

糟糠之妻 古B 東三教大 古A 文

宋襄之仁 古B 東教

漱石枕流 古B 東三教大数明桐

古A 文大

蛇足 国総三教大明第 古B 東

古A 文

斷腸 国総東明 古B 東教

知音 国総桐 古B 東教大数第

古A 大

中石没矢 古B 明

長安如何日遠 古B 教大

朝三暮四 国総東三教大数筑桐

古B 大明文第 古A 三文

蟪蛄之斧 国総明

(狐)借虎威 国総東三教大数筑

第 古B 大 古A 文

背水之陣 古B 東明第桐

不若人有其宝(子罕弗受玉)

大第

刎頸之交 古B 東三教数明 古A

筑

先從隗始 国総東三教大第 古B

東大筑桐 古A 教文

矛盾 国総東教第 古B 明 古A 文

孟母三遷 古A 文

孟母斷機 古B 三明 古A 東

病人膏肓 古B 三筑桐

梁上君子 古B 三教数桐

兩頭蛇 国総第 古B 大明

QUESTION & ANSWER

返り点の指導法

Q 返り点の学習でつまずいてしまう生徒がいます。どのようにアプローチしていけばいいでしょうか。

という手本を示した後、「観映画」「帰故郷」などの例題に取り組ませます。

二点の学習時、例えば最初に提示したものが「①〇〇〇」ならば、「②③①」などと番号を振る生徒もいるかもしれませんが、「行」学校」を「校に行く学」などと読む者はいないでしょう。もともとの語彙を頼りに、自然に読む順序をマスターしているのです。

身近な熟語を用いた訓読の学習法は、句法の学習においても応用できます。再読文字を学ぶ際に「未来」「将来」を「未だ来たらず」「将に来たらんとす」と読み下すことができれば、両者のニュアンスの違いも明確になり、生徒の興味を喚起することにつながるでしょう。

このように身近な言葉から始め、その後で本格的な文に取り組ませるのが、最も効果的な指導法ではないでしょうか。

A 七戸音哉

国際基督教大学附属高等学校講師

返り点に従って漢文を訓読する際、必要のない部分まで順番を変えて読んでしまう生徒が多いように思われます。その背景には、初期の学習時に往々にして採られることの多い、漢字の代わりに○や□などの空欄の合間に返り点を付したプリントを生徒に配り、読む順番に番号を振らせていく方法の影響があるように思えてなりません。返り点の学習は、はじめから漢字を用い

て行えばよいと筆者は考えます。ただし、この「漢字を用いて」は、何も「論語」や「孟子」などの「高級食材」でなくともよいでしょう。筆者の授業では、より身近な熟語を用いて説明しています。例えば「讀書」という白文で書かれた熟語を「書を読む」と読み下すための方法として「読書」という訓点(返り点+送り仮名)付きのものを教員が示し、その後「飲酒」「登山」「下山」「乗車」などの同様の構造をもつ熟語に対し、生徒の手で「飲酒」「登山」「下山」「乗車」などと訓点を書き込ませます。一、二点の場合は、「行」学校」

西郷隆盛の

漢詩の魅力

諏訪原 研すわはら けん

(河合塾)

■漢詩から読み解く
西郷隆盛のころ



■四六判・並製・272頁
本体 1,900円＋税

西郷に関する本は多数世に出ているが、評伝がほとんどで、しかもその多くは新味に欠けたものである。そこで従来とは違った角度から西郷を論じてみようと思ひ、今回、『漢詩から読み解く西郷隆盛のころ』という本を上梓した。

革命家・政治家としての西郷はよく知られているが、彼が二百首近い漢詩を残していることは案外知られていない。西南戦争にゆかりのある熊本の人吉出身の友人にこの本を贈ったところ、「西郷が詩を詠んでいたとは知らなかった」という驚きの感想を寄こしてきたが、読書家である彼にしてそうなのだから、一般的にはなおさら知られていないに違いない。

西郷の漢詩の基底にあるもの

西郷は、当時の武士がみなそうであったように、幼少の頃から漢籍による文章の読み書きの教育を受けていた。特に鹿児島では郷中教育という、地域の青少年の自主的・互助的な教育制度が発達しており、長年そのリーダーを務めていた西郷は、若年の者たちに教える立場でもあったので、漢籍に対する理解は深かったと思われる。

ただし、西郷が本腰を入れて漢詩を詠むようになったのは、三度目の遠島である沖永良部島に流されてからである。狭い座敷牢に閉じ込められて行動の自由を奪われた境遇では、読書や書道・作詩といった方面に救いを求めざるをえなかった。

書と漢詩の指導は同じ流人仲間の漢学者川口雪篷が務めた。そのころの作品に次のような詩がある。

偶成

獄裡氷心甘苦辛

辛酸透骨看吾真

狂言妄語誰知得

仰不慚天況又人

偶成

獄裡氷心苦辛に甘んじ

辛酸^{しんさん}骨^{ほね}に透^{とお}りて吾^{わが}が真^{まこと}を看^みる

狂言妄語^{きやうげんもうご}誰^{たれ}か知^しり得^えん

仰^{あお}いで天^{てん}に慚^はじ^ず 況^{いわ}んや又^{また}人^{ひと}をや

(○ || 平字、● || 仄字、◎ || 押韻字)

獄中でも心は氷のように澄んでいるので、どんな苦勞にも耐えられる

苦勞が骨身にしみてこそ、自分の真価がわかるのだ
偽りやでたらめが横行しているなかで、誰に真実がわかるか

私は天を仰いで恥じることは何もなく、まして人に対してはなおさらのことだ

承句の、辛苦に耐えてこそ自分の真価がわかるという趣旨は、他の詩でもしばしば詠まれている。たとえば、「雪に耐えて梅花麗しく、霜を経て楓葉丹し」「外甥政直に示す」や、「幾たびか辛酸を歴て志始めて堅し」「感懐」といった具合である。

要するに、堅固な精神を育むのは、さまざまの艱難辛苦に耐え、それを乗り越えていく忍耐力・意志力なのだという考えで、これは彼の詠んだすべての漢詩の基底にある考え方だといつてよい。そして、この思想こそが彼の漢詩の魅力でもあるのである。

この詩を形式の方面から見ると、押韻が辛・真・人の上平十一真で、仄起格(起句の第一字目が仄字●で始まる格)の七言絶句である。起句の第五字目「甘」が平字○(本来は仄字●であるべき)になっている以外は、すべて平仄の規則に合致している。このように、西郷の漢詩のほとんどは、正しい平仄の規則を踏まえた本格的なものである。

西郷の中国古典への造詣

さきの詩の起句中の「氷心」は、盛唐の詩人王昌齡の次の七言絶句を典拠としている。

芙蓉楼送辛漸

寒雨連江夜入吳

平明送客楚山孤

洛陽親友如相問

一片冰心在玉壺

芙蓉楼にて辛漸を送る

寒雨江に連なりて夜呉に入る

平明客を送れば楚山孤なり

洛陽の親友如し相問はば

一片の氷心玉壺に在りと

冷たい雨が長江に降り注ぐなか、夜、呉にやって来た

明け方君を見送ると、楚山がぼつんと佇んでいる

洛陽の友人が、もし私のことを尋ねたら

ひとかけらの氷の芯が美しい壺の中に在るように、清らかな心のままだったと答えてくれ

この詩は、左遷されて江寧こうねい(南京)にいる王昌齡のもとに、洛陽から友人の辛漸が訪ねてきて、久闊きうくわんを叙したのち、また帰っていくのを、長江を下った東の呉の芙蓉楼まで見送った際に詠んだもので、『唐詩選』に収められている。

西郷は二百首近い漢詩を詠んでいるが、その中の二割近くが中国古典からの引用や、故事あるいは歴史上の人物に関連した事項を詠み込んでいる。これは、彼が遠島生活の暇に飽かせて、『唐詩選』・『古文真宝』・『文選』などの詩文集や、『春秋左氏伝』・『史記』・『漢書』・『蒙求』・『十八史略』などの史伝、および四書五経に代表される経書に親しんでいた証左である。

今回、西郷の詩を選ぶに当たっては、中国古典に典拠を持つ詩を主に取り上げて論じることにした。一般の読者にとつて典故のある言葉は一見難解に見えるかもしれない。だがその由来や背景を知れば、詩をより深く理解できると考えたからである。

漢詩にみる真情

西郷を論じる本は、必ず西南戦争を論じてその掉尾とうびとする。「慶応の忠臣、明治の逆臣」と評される西郷の晩年の側面を論じて初めて西郷を語ったことになる、というわけだ。これは言うまでもなくまっとうな考えだ。人物を論じるとき、功績だけ、あるいは罪過だけ論じるのは公正さを欠く。やはりその人物の人生全体を通覧して初めて、その真の姿が捉えられるのだ。

しかし、あえて私は西南戦争には触れなかった。一つには、人物評伝を書きたかつたのではないこと、二つには、歴史的事項に物申すほどの学識が私にはないこと、三つには、これが最大の理由であるが、西南戦争中に西郷の詠んだ詩がないことによる。

私がこの本を書いたのは、『南洲翁遺訓なんしゅうおういくん』を始めとする従来の西郷を扱った本では得ることのできない西郷の心の奥底に、直接触れてみたかつたからである。西郷は著作を残さなかつたので、それを可能とするのは、西郷の真情が吐露された漢詩を読み解く以外にない。幸い西郷が多数の漢詩を残してくれたおかげで、百四十年後の今も、彼の魂に直に触れられるわけで、なんとも素晴らしいことである。

遊びながら漢文に親しむ——学び始めに

有^{あり} 吉^{よし} 桂^{けい} 子^こ

(岡山県立鳥城高等学校)

●今も生きている漢文

「あー、それ飲んじゃ駄目って書いてあるのに！」私はテレビに向かって叫んでしまった。先日テレビのバラエティ番組を見ていたときのことである。それは、芸人がディレクターと二人で台湾を貧乏旅行をしながら一周するというコンセプトの番組だった。お金を切り詰めるために、二人はなるべく安い飲料水を探していた。上に「生飲」と書いてあるガソリンスタンドのような機械を見つけ、喜んで持っていたペットボトルに入れ、それをごくごくと飲んでいた。その看板には、「正確には「應(応) 煮沸 勿生飲」と書かれていた。漢文の知識が多少でもある人間にとっては、「應(応)」は「まさにくべし」と読み、「くしなければならぬ」という意味の再読文字であり、「勿」は「くなかれ」と読み、「くしてはいけない」という禁止の句形だと、すぐにわかる。看板には、「煮沸しなければならぬ 生で飲んではいけない」ときちんと書かれていたのだ。彼らはその後、親切なおばさん

に日本語で「そのまま飲んじゃ駄目よ」と教えられ事なきを得た。今も生きている漢文を実感し、不思議な思いに駆られた。

●生徒にとって漢文を学ぶということ

私は今まで普通科高校で教えているときには、「この句形はテストで良く出るから覚えよう」などと、テストのことを前面に押し出して教えていたように思う。普通科高校の生徒にとっては、テストで高得点を取ることがモチベーションを上げることに通じるからだ。

しかし、今私が勤務している鳥城高等学校は、定時制の高校で、四年制大学を希望している生徒もいる反面、小学校の段階でつまづいてしまっている生徒もいて、生徒の学力差は大きい。今までのようにテストを持ち出しても、生徒は食いついてこない。



●漢文って外国語なの？

本校では一年次に国語総合を三時間（三単位）学ぶカリキュラムになっている。その内一時間分を古典の時間に割り当て、古文と漢文を学ぶ。

漢文の授業の最初で、A3判の紙にイタリア語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、韓国語、中国語、英語で「愛しているよ」という意味の言葉を打ち出し、発音していく。生徒は最初ぼかんとしているが、K-POPの好きな生徒などは、「あー、愛してるって意味だ」とこそこそ言っている。中国語には「愛」という漢字が入っているので、なんとなく予想した生徒も多いよう。英語で「I love you.」と読むと、全員うれしそうににやにやしている。生徒に意味を答えさせ、日本語で「（私は）（あなたを）愛してる」と、中国語で「我愛你」と、英語で「I love you.」を板書し、「我は「われ」と読み、「私」という意味、「你」は「なんじ」と読み、「あなた」という意味、「愛」は名詞としても使われるが、ここでは動詞として「愛する」という意味で使われていることを

説明する。「何か気がつかない？」という問いかけに、勘のいい生徒のいるクラスでは、「なんか、英語と似てる」という答えが返ってくる。「そうだね、中国語って、実は英語と似ているところが多い。今あなたが英語を学校で学ぶように、昔の日本人たちは、外国語としての漢文を学んでたんだよ。」というとき、「漢文って外国語なんだ。難しいはず。」という反応が返ってくる。そこで、返り点と送り仮名をつけてやり、「我汝を愛す」と読んでやる。「昔の日本人たちのすごいところは、『我愛你』を『ウォー アイ ニー』と中国語読みしてから訳すのではなく、いきなり文語の日本語読みをして、日本語として扱おうとしたところなんだね。」

「では、クイズです。次の漢文は有名なアニメや漫画の台詞を漢文に訳してみたものです。わかったら答えてね。」と言い、「我須成海賊王矣。」「若放棄試合、則試合終了。」など、まず漢文のみで示し、それに返り点や送り仮名をつけてやる。答えは順に、「海賊王に俺はなるー」【『ONE PIECE』／ルフィ】「あきらめたらそこで試合終了ですよ。」【『SLAM DUNK』／安西監督】となる。音読してやると、わかる生徒が多くなる。漢字だけでも何となく意味がわかるものもあるが、訓点をつけることでもっとよくなることに気がついてくれたようであった。

● 返り点つてとつてもシステムティック

次の時間では、返り点の仕組みを理解することを目標として、まず教科書を使い一通り説明する。その後、「じゃあ、次のプリントのなぞなぞに答えてみて」と言つて、日本語をばらばらに並べ、返り点をつけたプリントを配布する。生徒はクイズやなぞなぞは好きで、友達と相談しながら、楽しくうに返り点を解読し答えを書いていく。「じゃあ、わかった人、答えて。」と言つと、次々に答えを言つてくれる。「すごいねえ、どうしてわかったの？」と聞くと、「だって読んだらわかるよ」。なぞなぞとしては簡単なものが多いので、生徒たちは得意そうに答えてくれる。「これが読めるつてことは、返り点の仕組みがわかつてることだよ。返り点つて、すごく良くできていて、決まりがわかると、誰でも同じように読めるようになるのね。じゃあ、教科書のこの問題をやっ

■ 返り点のなぞなぞプリント（抜粋）

次のなぞなぞを答えよ。答えは平仮名でよい。

- ① てレくレ丸いばつす 何は星。
- ② 何はびびくる出らかレ口。
- ③ す二齒磨きをとと噂いう二の何蛇は一。
- ④ 何下の二数字二な二九が嫌い動物は上。

①梅干 ②あくび ③はぶらし(じ) ④スカンク

てみようか。」と、教科書の問題を提示する。返り点から読む順番をつけるものや、読む順番に返り点をつけるものなど、さつきやったことをもとに生徒たちは解いていく。つまりさつきさうになる者もいるが、わかっている者が教えている。

● 返り点や送り仮名がわかれば漢文は怖くない

その後、再読文字や返り点、置き字などの説明を一通り済ませ、いよいよ少しまとまった文章を読むことになる。孟子の「五十歩百歩」を、本当に少しづつ読んで書き下し文にすることを目標に、現代語訳はこちらからどんどん説明していく。「恵王はどうして『不可なり』つて言つたのかわかる？」という質問には、「百歩じゃないだけで、逃げたことは同じだから」という答えが返ってくる。「でも、百歩と五十歩じゃあずいぶん違うよね。」と言つと、「逃げたつてことがポイントだから」と答えてくれる。そこで、「孟子が言いたいことも、小手先の政策の違いじゃなくて、王が国民に対して仁の心を示すことが大事なんだつてことなんだね。返り点や送り仮名をつければ、二千年以上昔の孟子の言葉を、今の私たちが読んで理解できる。すごいよね。」と締めくくつた。漢文を学ぶことの意義を、生徒たちが理解してくれたかどうかはわからない。しかし、「読める」「わかる」を大切にしたい。少しでも拒絶感を少なくできたのであれば幸いである。

①

孔子像に見守られて

まっお
松尾 しのぶ

(鹿児島市立明和中学校)

未だにアナログを愛する私は、デジタルとの融合こそが「わかりやすい授業」につながるのではと密かに信じています。長崎

の孔子廟で購入した掌ほどの孔子像に見守られながらの「論語」の授業では、教科書や自作ワークシートの他に、全国漢文教育学会編著『はじめてであう論語(資料a)』、NHKデジタル教材10minボックス「漢文(3) 論語(資料b)」、孔子の里「論語カルタ(資料c)」などを活用しています。活動のねらいは、孔子のこぼを読み味わった感想をグループで交流しながら、改めて孔子のものの見方や考え方をみつめ、自分の考えを深めることです。

授業は次の五つのステップで行いました。

- (1) 孔子像から、どのような人物なのか想像する。
- (2) 「吾十有五而志于学」と「己所不欲：」の書き下し文を音読し、訓点を参考に書き下しに挑戦する。また、『はじめ

てであう論語」の訳を参考に孔子の言いたいことを捉える。

★板書はカードを多用し、個人差対策として机間指導に努めます。その際、些細なことも大きく褒めるように心がけています。

- (3) 資料を通して、時代背景や孔子の生き方などを把握する。

資料a)平易な表現で生徒もわかりやすい資料です。

資料b)視覚資料(動画、静止画)に説明を補う形で理解の助けにします。

- (4) 「共感すること」と「疑問に思うこと」を、理由を添えてまとめ、グループ内で交流後、自分の感想を発表する。

- (5) 資料c)で様々なことばに触れる。

★とても盛り上がり、授業後、図書館から孔子に関する書籍を借りる生徒もいます。

(4)で生徒は、扱った二つのことばについて、様々な考えを述べていました。以下、生徒の記述を紹介します。

「共感」僕も受験生として共感できた。やっぱり学問は奥が深いのだ。

「疑問」孔子の言うように、人生そんなにうまくいくのだろうか。

「交流後の感想」

・孔子は、弟子にこんな人になってほしいと願ったのだと思う。

・交流してみても、いろいろな考えや答えがあることに驚きました。孔子の天命とは、弟子に自分の考えを教えることだと思う。

・「三十にして立つ」は遅いという考えになるほどと思った。自分がこの年でこうありたいと思うことは大切だと思う。同じことばでも、感じることは違うのだ。

・自分がしてほしくないことを人にしてはいけないということは、皆が守れているものではない。相手のことを考えたからこそ、相手の望まないことをしなければならぬこともある。

一年時の故事成語、二年時の漢詩の学習を踏まえた論語の授業で、生徒一人ひとりの成長や、様々な今後の課題に気づくことができました。時々、湯島の孔子像にもエネルギーをいただきながら、さらに研鑽を積みみたいと思います。

二〇一八年度センター試験「国語」漢文の指導

北澤 紘一
(代々木ゼミナール)

概要と本文の要旨

二〇一八年度センター試験「国語」漢文は、南宋の李燾の歴史書『続資治通鑑長編』からの出題である。本書は、李燾が、世界史でおなじみの司馬光『資治通鑑』に続ける目的で、北宋の皇帝九代、二六七年の歴史を年代順に記したものである。本文の字数は一八七字で、前年度より一字減少したが、センター漢文本文としては標準的な長さ、設問数六問、マーク数八個は前年度と全く同じであった。前年度まで数年間随筆からの出題が続いていたが、本年度は久しぶりに歴史書Ⅱ史伝からの出題となった。

本文の要旨は、「北宋の人Ⅱ王嘉祐が、当時の首都知事Ⅱ寇準の質問に答えて、君臣関係が良好であることの重要性を説き、寇準が王嘉祐を高く評価した」というもの。随筆の場合、筆者の感慨部分が抽象的で読みづらいことがあるが、本年度の本文は、登場人物の発言の趣旨が明確で、読みやすいものであった。また、長さ・ジャンル・内容とも高校の教科書に多く採られている標準的な漢文であり、漢文をしっかりと学習した生徒が成果を挙げることができたものと思う。

設問の解説

【問1】二重傍線部X「議」・Y「沢」の意味の組合せ問題

X「議」には多くの意味があり、①「相談する」②「非難する」③「論評する」④「批判する」は、「議」の辞書的な意味としては問題がない。傍線部は「外間準を議すること云何」(世間では私Ⅱ準をどのように議しているか)という疑問文中にあるので、その応答から考える。王嘉祐は「外人皆丈人旦夕入りて相たらんと云ふ」(世間の人々は皆、あなたがすぐに朝廷に入つて宰相になるだろうと言っています)と世間の人々の評価を答えているので、③「論評する」が正解。⑤を選んだ受験生が多いが、王嘉祐の応答には「批判する」といったマイナスの要素はない。

Y「沢」には、「うるおす」「恩恵を与える」という意味がある。現代でも使う「恩沢」という語を知っていれば、すぐに③「恩恵を施す」が選べたであろう。

【問2】波線部Ⅰ「知之」・Ⅱ「知開封府」・語句の解釈問題

Ⅰ「知之」は、「之を知る」と読み、ここでは「知る」は「理解する」という意味で、「之」は王嘉祐を指す。波線部の

【問題文】

嘉祐^{カウ}禹^ウ偁^ウ子^シ也^{ナリ}。嘉祐^{カウ}平^{ヘイ}時^シ若^ニ愚^ウ駿^{ケン}独^{ドク}寇^{コウ}準^{ジュン}知^チ之^ノ。準^{ジュン}知^チ開^{カイ}封^{フウ}府^フ一^ニ日^ニ問^{モン}嘉祐^{カウ}曰^ク曰^ク外^{ガイ}間^{カン}議^ギ準^{ジュン}云^ク何^ニ嘉祐^{カウ}曰^ク外^{ガイ}人^{ジン}皆^ハ云^ク文^{ブン}人^{ジン}且^ツ夕^{セキ}入^リ相^{ソウ}準^{ジュン}曰^ク於^ニ吾^ウ子^シ意^イ何^ニ如^ク嘉祐^{カウ}曰^ク以^テ愚^ウ觀^{カン}之^ノ文^{ブン}人^{ジン}不^レ若^ク未^ダ為^ル相^{ソウ}為^ル相^{ソウ}則^{シテ}譽^ヨ望^{ボウ}損^{ソン}矣^{ナリ}。準^{ジュン}曰^ク何^ニ故^ニ嘉祐^{カウ}曰^ク自^レ古^ク賢^{ケン}相^{ソウ}所^ト以^テ能^ク建^{ケン}功^{コウ}業^{ヤク}一^ニ沢^ニ中^ニ生^ニ民^ニ上^ニ者^{ナリ}其^レ君^{クニ}臣^{シン}相^{ソウ}得^ル皆^シ如^ク魚^{イサ}之^ノ有^ル水^ニ故^ニ言^フ聽^{カレ}計^{ケイ}從^フ而^{シテ}功^{コウ}名^{メイ}俱^ニ美^{ナリ}今^ニ丈^{チヤウ}人^{ジン}負^ヒ天^{テン}下^カ重^{ジュウ}望^{ボウ}相^{ソウ}則^{シテ}中^{チュウ}外^{ガイ}以^テ太^{タイ}平^{ヘイ}責^{セキ}焉^{ナリ}。丈^{チヤウ}人^{ジン}之^ノ于^ニ明^{メイ}主^{シュ}能^ク若^ク魚^{イサ}之^ノ有^ル水^ニ乎^カ。嘉祐^{カウ}所^ト以^テ恐^ル譽^ヨ望^{ボウ}之^ノ損^{ソン}也^{ナリ}。準^{ジュン}喜^ヒ起^キ執^{シツ}其^レ手^テ曰^ク元^{ゲン}之^ノ雖^モ文^{ブン}章^{チャウ}冠^{クワン}天^{テン}下^カ至^ニ於^ニ深^{シン}識^{シツ}遠^{エン}慮^ロ殆^ダ不^レ能^ク勝^ル吾^ウ子^シ也^{ナリ}。

(李燾『統資治通鑑長編』による)

直前にある「嘉祐は平時は愚駿のごときも、独り寇準のみを知る」(王嘉祐は普段は愚か者のようであったが、寇準だけは彼を理解していた)という逆接に注目できれば、①「王嘉祐が決して愚かな人物ではないことを知っていた」が選べる。

II 「知開封府」の「知」は、「治める・統治する」という意味で、現代語の「知事」「知行」の「知」がこれに当たる。古文単語の「しる(知る・治る・領る)」に「統治する・領有する」という意味があることを思い出せるとよい。③「開封府の知事を務めていた」が正解。誤答⑤が多いが、「知開封府」と「開封府」は「知」直後にあり「知」の目的語である。⑤「開封府で知りあった」とはならない。

【問3】傍線部A・白文の書き下し・解釈問題

センター白文問題の定番は、返り点と書き下し文の組合せ問題であるが、書き下し文だけでも考え方・解き方に変更はない。解釈の選択肢は書き下し文の選択肢に合わせて作られているので、書き下し文がわかれば、自ずと解釈も選べる。

(i) 傍線部中の「若」に注目する。「若」には「もし(ならば)」「ごとし(―のようだ)」「なんぢ(お前)」「しく(及ぶ)」といった読み・意味があるが、「不若」と直前に「不」があれば、「し力ず(及ばない)」である。ただ「若かず」及ばない」と覚えるだけでは不十分。「A不若B」AハBニシカズ(AはBに及ばない・AよりBの方がよい)という形で捉えてほしい。この場合Aは省略可能だが、Bは省略

できない。「不若〔未為相〕」は、「〔未為相〕に若かず」と下の「〔未為相〕」を讀んでから「若かず」に返る。②「〔未だ相の為にせざる〕に若かず」④「〔未だ相と為らざる〕に若かず」に絞られる。世間の人々は寇準本人が宰相になるだろうと論評しているので、④が正解。②では宰相のために何をしないのかが不明である。(ii)書き下し文④「丈人未だ相と為らざるに若かず」に合う解釈は③「あなたは〔今宰相になるより〕まだ宰相とならないほうがよろしいでしょう」。

【問4】傍線部Bの主体判定問題

正答率の低い問である。本文で熟慮せずに選択肢を切つていこうとすると正解に到達できない。傍線部直前に「故」とあり、「故に言聽かれ計従はれ」(だから発言が聴いてもらえ計が従つてもらえる)となつていたので、その前「其の君臣相ひ得ること魚の水有るがごとければなり」から考える。注13に「君臣の關係が極めて良好であるさま」とある。君臣の關係が極めて良好であるから↓臣下の発言が君主に聴いてもらえ、臣下の計が君主に従つてもらえる、と考えるのが自然である。選択肢に「臣―君」というものがないので、ほぼ同義の③「賢相―明主」が正解。

【問5】傍線部Cの理由説明問題

傍線部中にある「所以」は、ただ「原因・理由・方法・手段」と意味を覚えるだけでなく、「―は、A、所以―」―ハ、Aノ〜スルゆゑんナリ(―が、Aが〜する理由〔原因・方法・

手段)である)という形で捉える。何が「私―嘉祐があなたの名声が損なわれることを心配する理由」なのかは直前にある。「丈人の明主に于けるや、能く魚の水有るがごときか」(あなたと皇帝陛下とは、水魚のように良好な關係になれるでしょうか)と、寇準と皇帝とに良好な君臣關係を望めないことを示している。「もし寇準が皇帝と親密な状態になれば太平は実現されず」とある②が正解。誤答④が多いが、寇準と皇帝とが良好な君臣關係を築けないことと、「寇準が皇帝の意向に従つてしま―うこととは違う」。

【問6】傍線部Dの内容説明問題

実質上、本文全体の内容把握を試す問である。王嘉祐は、宰相が功績を挙げるためには皇帝との良好な君臣關係が必要であることから、寇準に宰相にならないよう提言している。④「王嘉祐は皇帝と宰相の政治的關係を深く理解し、寇準の今後の進退についての確に進言している」が正解。

予想と対策

今年度の本文は、対話文によつて構成されていた。来年度以降、筆者が読者に筋道立てて自身の主張を伝える論説文の出題が予想される。設問としては、古典漢文に由来し現代国語の言語文化を形成する漢字・語句・定型表現の句形・漢詩等の知識が多く問われるだろう。単に読みと意味を覚えるだけでなく、正しい理解を身につけていきたい。

今号から本連載の執筆者が変わりました。先生方のご意見やご要望をお寄せください。

太陽と月の衝突

樋ひ口ぐち泰やす裕ひろ
(文科大学准教授)

古くから李杜優劣論というものがある。唐を代表する二大詩人、李白と杜甫をくらべてその優劣を定めるといふものだけにわかには杜甫が再評価されだす中唐期におこり、とりわけ宋明の頃に盛んにおこなわれた。なかには、二人を倫理、道徳的側面から裁断するなど、詩人の評価として、まして詩の批評としては首肯し難いものも含まれるけれども、ある人は、李白の「飄逸」に目を向ける一方で、杜甫の「沈鬱」に目を向け、また、ある人は、李詩の絶句ないし古詩に真価を見出す一方で、杜詩には律詩ないし近体詩に真価を見るところ、なかば定説化しているような議論もたくさん生まれた。これまで何度となく引かれてきた聞ぶん一いっ多たによる二人の出会いを太陽と月の衝突になぞらえた比喩は秀逸であったが、その喩えは、二

人の詩を読み解き、詩人としての生に思いを巡らせていく際にも連想されるのであつて、李詩は時に太陽となつて杜詩という月を明るく照らし出し、あるいはそれが持つかげりをよりいっそう濃くしてみせ、翻つて杜詩も時に太陽となつて李詩という月を照らすことで、李詩が持つひかりとかげりとをより鮮やかに映し出す。以前、本誌一九一号(二〇〇五年五月)で李杜の特集が組まれ、「旅」、「別れ」、「家族」、「自然」、あるいは「安史の乱」といったいくつかのキーワードを通して李白の詩と杜甫の詩を読むという試みがなされたのであつたが、いずれのキーワードにおいても、対照的、且かつ鮮明に二人の詩人とその詩が描き出されていた。李詩を読むのに杜詩との比較が、また、杜詩を読むのに李詩との比較が、現代の研究においてもなお大変有効であることを示している。

現在、編集を進めている向嶋成美主編『李白と杜甫の事典』は、二〇一九年春の刊行を予定している。李杜の生涯を並べ、李杜の旅を並べ、そして、李杜の詩文を並べた、書名の通り、李白と杜甫のさまざまな並べた事典である。ほかに、二人の生きた背景として、唐という時代の歴史、政治、地理、文化などを概説した章も立てている。本書における二人の新たな出会いが、繙く人たちに何をもたらすのか、さらには今後の李杜研究に何をもたらし得るのか、編者の一人として、率直に言えば、不安を感じつつも、しかし、それ以上に大きな期待を抱きながら、書架に並ぶ日を待ち望んでいる。

昨年十月、向嶋先生が長逝された。突然のことにこのいまも受けとめきれずにいる。最後にお目にかかったのは、その三か月前の夏、早稲田大学で催された中国化学学会の大会でのことだった。無理を通そうとする私の拙い杜甫論に、「久しぶりに君の文学らしい発表を聞いた。」と笑っておられた。数年来、向嶋先生には目録学についてご指導いただくことが多かったからだと思う。肝心の発表の中身については、学生の時分とさほど変わらず、厳しいご教示を賜り、恐縮しながら拝聴したのであったが、それでも先生は笑っておられた。先生はいつも笑っておられた。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

二〇一九年春刊行予定

●『李白と杜甫の事典』 向嶋成美 主編

A5判上製 函入・八〇〇頁(予定)

【編集・執筆】

安立典世 加固理一郎 坂口三樹
谷口真由実 村田和弘 樋口泰裕

【執筆協力】

大橋賢一 三上英司 渡邊大ほか

目次構成(予定)

I 李白と杜甫

II 李白

李白の生涯／李白と旅／詩／文章

III 杜甫

杜甫の生涯／杜甫と旅／詩／文章

IV 李白と杜甫を知るために

I 李白と杜甫の時代

唐王朝の歴史／唐の政治と官制／

唐代の地理／盛唐の文化

2 唐詩の形式

3 文学史の中の李白と杜甫

4 李白と杜甫の名句百選

5 李白と杜甫の諸本／参考文献案内

付録 全作品リスト／年譜／行跡図／助字解説／

詩題・人名・事項索引ほか

諏訪原 研 著

『漢詩から読み解く 西郷隆盛の「いろ」』

(四六判・並製・二七二頁・
 本体・九〇〇円＋税 大修館書店)



武士社会から四民平等の社会へ移行していく明治維新の胎動は、すでに幕藩体制の乱れや一揆の頻発、欧米列強の開国を迫る動きなどに見られる。その変革の時代を担い近代国家の礎を築いたのが志士たちである。中でも西郷隆盛は、維新戦争の先頭で戦い、さらに大政奉還、版籍奉還、廃藩置県と続く大改革を中心で担った一人である。島津斉彬に見出され、坂本竜馬が「馬鹿だ、大馬鹿だ」と評し、勝海舟にも「天下で恐ろしいものを二人みた」と言わしめたほどの逸材だ。その一方で、今なお「せごどん」「やい、やいあ」と多くの人に慕われる西郷とはどんな人物であったのか。このつかみどころのない西郷の「いろ」を直接彼の手になる漢詩を手がかりに読み解いてみようというのがこの著である。中国古典に造詣の深い著者の平易な解説がうれしい。

一章には、西郷の死生観を形づくったと

思われるいくつかの体験が紹介されている。著者は、「お由羅騒動」で切腹を申しつけられた高崎五郎右衛門の死、主君斉彬の死とともに手を取り合って身投げし死なせてしまった僧月照の死に着目している。これらの体験から得た「生と死は一体である」「身を修め、天命に順って生きる」との死生観が、その後の彼の大胆かつ果敢な行動の根底にあったと見ている。故にこの死生観が、二章「二度の遠鳥」、三章「倒幕の先頭へ」、四章「鹿児島に一時帰国」、五章「維新政府の主役」、六章「隠遁生活」、七章「終焉」と章立てられた彼の人生、そこで生まれた作品の検証軸の一つとなっている。座右の銘「敬天愛人」については、著者は西郷が天に対する畏敬の念を抱くとして、月照との入水事件がきっかけだとしている。この事件の後、西郷は延べ五年に及ぶ遠島に耐える。その後中央での活躍が待ってい

るのだが、彼がまさに天命を受け容れ、それに従って生きていこうとの覚悟だったこととはうなずける。また、島では薩摩の圧政に苦しむ島民たちと出会う。彼はその厚い人情に生かされ、ついには島妻を迎え、愛児まで授かる。「愛人」は、「敬天」とのセットで意味を持つのだが、こうした体験の一つ一つに基づいて会得されたものだろう。

西郷が多くの人に慕われる理由はいくつか挙げられると思うが、私の心に留まったのは「題「残菊」」の詩である。この「残菊」にたとえられた志こそ「忠恕」のまごころだろう。遭韓論を容れられずに下野した西郷の気がかりは、特権を奪われた士族たちのことだった。版籍奉還で平民との違いはなくなり、徴兵令でこれまでの特権も失う。廃刀令と秩禄公債はその仕上げだった。自らもその政策の一端を担っただけに、下野後は私学校を設立し、吉野開墾社では授産も行った。しかし、新政府は不平士族や農民の政変を恐れ、西郷らをつぶしにかかす。事ここに至り西郷は担がれて新政府に弓を引く。私欲を絶ち、「忠恕」のまごころを持ち続け、天命に従って信念を貫いた西郷を慕う人々は当時も今も多い。

(福永洋一・元教員)

松丸道雄 著 『甲骨文の話』

(四六判) 並製二四〇頁、
本体一八〇〇円＋税 大修館書店・あじあブックス



甲骨文字の存在はよく知られている。現存する最古の漢字の史料であること、内容のほとんどが殷王朝における占いの記録であることも、本誌の読者諸賢にとっては常識に属するかもしれない。しかし、その日本における認知度の高さに反して、甲骨文字の史料的人格や諸問題、それに研究史などについての一通りを、簡明に解説した書籍というものは、決して多くなかった。

本書は、甲骨文研究の碩学が、一般読者向けに記してきた文章をまとめたものである。今や入手困難となっていた論説が多く収録され、それだけでもまさに待望の書と言えるのであるが、改めて読んでまず唸らざるを得ないのは、その内容のクオリティの高さについてである。

一般読者向けと上述したが、それは文章表現の話であり、決して初歩的な説明に終始しているわけではない。内容はむしろ、

先鋭的で魅力的な学説を、至る所に含むものである。しかも議論の過程を省いたり質的に下げたりしてはいないので、文面が平易であるにも関わらず、専門的知識を有する者が読んで「ちゃち」に見えてしまうようなところが全くないのである。

例えば、ある占いの記録である甲骨文について、その貞人(占いを行った人物)と契刻者(甲骨文を書き遣した人物)とは別人である、という自説を展開するくだりを見てほしい(本書第四章など)。「占った者がその結果を記録した」という、学界の多数意見に対する正面からの反論だが、難解な議論を全く持ち出さないにも関わらず、極めて論理的に定説を斬ってしまうところに、まさに達人の技を見る思いを抱く。

もう一点唸らざるを得ないのは、本書を構成する各章が、非常に長い時間の中で記されてきた、ということについてである。

本書第I章「甲骨文略説」は一九五九年の発表で、筆者二四才の頃の作品ということになる。そのことを知った上で読めば、その時分にこの内容、この完成度に達するかと驚かされよう。一方で、最終章「『甲骨文合集』の刊行とその後の研究」は、本書のための書き下ろしである。筆者が傘寿を過ぎてなお、学界最先端の成果を摂取し、新たな思索に進まんとする熱意が伝わってくる。これほどの長きに亘って第一線に立ち、学界をリードし続けるということは、余人に真似できるものではないだろう。

思えば、「日本甲骨学会」が刊行した雑誌『甲骨学』を通じ、日本における甲骨文研究を大いに進展させた綺羅星の如き研究者たちは、その多くが既に鬼籍入りされた。しかし、『甲骨学』執筆陣の一人だった松丸氏が、未だ衰えぬ探求心をもって健筆をふるわれているという一事は、後進にとって大変心強く、また刺戟となる。その筆者から贈られた本書は、初学者から研究者まで、まさに必携必読と言うべきである。

(高津純也・川村学園女子大学教授)

時田昌瑞・安藤友子監修 ことわざ授業づくり研究会編

『授業がもつと楽しくなる！』

学校で使いたいことわざ』

(A5判・並製・一六〇頁・
本体一六〇〇円＋税 大修館書店)



本書はことわざ研究の達人と、ことわざで授業をつくるベテラン教師のコラボで生まれた作品である。監修者の時田氏には、ことわざに関する事典や辞典のほか、『思わず使ってみたくなる 知られざることわざ』（大修館書店）など数多くの著作があり、もう一人の監修者安藤氏は元東京都公立小学校の校長で、現在「ことわざ授業づくり研究会」を主宰している。さらに執筆者八名の方々は、みな現場経験を持つベテラン教師である。

書名の冒頭に「授業がもつと楽しくなる！」とある。このことから、授業の題材や投げ込み教材にことわざを使って、子どもたちにもつと楽しく、活動的で面白い授業を作りたいとする制作の意図が感じられる。

本書には様々な工夫が凝らされている。例えば、学校は時間割のもとに動いているから、その観点で授業の時間ごとに適した

ことわざに分けて説明している。教科の時

間はもとより、学級活動や道徳のほか、部活動の項目もある。総合学習ではユニークな「創作ことわざ」の手法も取り上げられている。さらに、時間割とは別に管理職編が設けられており、朝会、学校行事、職員会議、卒業式など様々な場面のスピーチでも、ことわざを役立てることができる。

本書を通読してあとがきに至り、ハタと膝を打つ思いがした。それは、「ことわざはおもしろい」という子どもたちの言葉を真摯に受け止め、ことわざを使って面白い授業

が、おももしろくなると、巧まずして子どもたちの知的好奇心が喚起され、お顔が立って前向きの姿勢となるから、面に光が当たって白くなるのである。このことは、学習指導要領改訂のスローガン「アクティブ・ラーニング」のねらいとも近似しているから、教科はもとより各領域におけることわざを使った学習は極めて有用だといえるべきである。

づくりに専心した教師の心映えである。国立教育政策研究所が二〇〇〇年度に発表した「学習意欲に関する研究」によれば、「子どもたちはどんなときやる気になるのか」ということをアンケートや聞き取りで調査した結果、第一位は「褒められたとき」、第二位が「授業がおもしろいとき」、第三位が「将来就く職業に関心をもったとき」であった。教師の創意工夫で授業

また、国のカリキュラム改訂により今年から本格的に始まる道徳教育や「特別の教科道徳」の題材にも打ってつけである。新たな道徳科では、「読む道徳」から「考える道徳」への転換が求められている。ことわざは、子どもたちが自ら意欲的に道徳的諸価値について考え、内面化するための気付きのきっかけを与え、実践の意欲につなげていくことにもつながるだろう。